

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 13 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520719

研究課題名(和文)外国語学習方略の指導効果に学習者要因が及ぼす影響：長期的な学習支援モデルの構築

研究課題名(英文)Influence of learners' individual differences on the effectiveness of strategy intervention: toward the development of long-term learner support system

研究代表者

池田 真生子(Ikeda, Maiko)

関西大学・外国語学部・准教授

研究者番号：00425323

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：学習者がメタ認知方略を習得する際、自身の英語学習を何とかしたいという強い情意を有し、さらに、メタ認知方略の有用性を再認識する足場を複数回踏む可能性のあることがわかった。同時に、習得を妨げる要因として、他者からの強制(他律的学習)の欠落や、方略使用時に感じる心理的負荷(コスト)が関与する可能性も明らかとなった。これらの仮説を検証したところ、外発的動機や自己効力感がメタ認知方略習得にある程度まで影響するものの、情意よりもむしろ、他者からの強制(他律的学習)のある環境の方が、影響が大きいという知見が得られた。この知見をもとに、他律的学習の一環として授業内での協働学習を提案し、その有用性を検証した。

研究成果の概要(英文)：This research found that in acquiring new metacognitive strategies language learners tend to have strong feeling that they want to solve the difficulty of learning, and then to confirm the effectiveness of the strategies taught in the multiple opportunities. Furthermore, some possible factors that impede their acquisition of metacognitive strategies were also found: the lack of other-regulated learning; and the effort required by learners to incorporate the strategies. These hypotheses developed were then checked. The results revealed that other-regulation of learning had more effect on the acquisition of metacognitive strategies than learners' affective factors, although extrinsic motivation and self-efficacy among their affective factors also had an influence to some extent. Based on these findings, this research proposed collaborative learning in the class as one of the ways to trigger other-regulated learning beyond the classroom, and verified its possibility.

研究分野：英語教育学

キーワード：メタ認知方略 学習者要因 他律的学習 協働学習

1. 研究開始当初の背景

(1) 方略使用と別個の学習者要因の関係性を探った研究は、90年代を中心に多くなされたが、方略指導の効果への影響を探究した研究は、いまだ実施されていなかった。

(2) また、方略の習得過程を解明する研究についても、まだ十分な研究結果が報告されておらず、今後の研究が待たれていた。

2. 研究の目的

(1) まずは、外国語(英語)学習者が、指導を受けたメタ認知方略をどのような過程で習得していくのかを探究した。

(2) その上で、英語学習者に対する方略指導の効果に、さまざまな学習者要因(動機、不安、自己効力感、学習スタイルなど)がどのように影響を及ぼすかを長期的に探り、方略の習得過程の解明を試みた。

(3) さらに(1)(2)の結果をもとに、適切な学習者支援モデル(教師の役割、教材の内容など)の提言を目的とした。

3. 研究の方法

(1) 授業内においてメタ認知・認知・社会/感情方略の指導をおこない、授業外での自己学習時における方略の使用状況の変化や習得過程に関するデータを、授業外学習の記録日記(約2.5ヶ月間分) 刺激提示による回顧法インタビュー、そして6ヶ月後の回顧的インタビューで収集した。刺激提示による回顧法インタビューでは、刺激として参加者自らが記述した学習記録日記を提示した。

そして、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに則って分析し、学習日記の中からメタ認知方略の使用に関する記述を抜き出し、コード化し、インタビューで得られた内容と照らし合わせながら、どのような状況の中でメタ認知方略を使用するようになったのかを分析した。

(2) 引き続き、授業内においてメタ認知・認知・社会/感情方略の指導をおこない、メタ認知方略の使用状況の変化と情意要因(動機、自己効力感、不安)の関係を量的に分析した。また、補完データとして、授業外学習における学習記録を記述データとして収集し、質的に分析し、方略の使用状況の変化を観察した。

(3) そして、(1)および(2)の結果をもとに、学習者の自律学習を支援するモデルの一案として、授業内での協働学習の導入の可能性を探るべく、全12回の協働学習後に自由記述アンケートを実施した。そして、得られた記述をコーディング、カテゴリー化して、協働学習の有用性に対する学習者の認識とその理由を探究した。

4. 研究成果

(1) 学習者が新しくメタ認知方略を習得していく際には、まず過去の学習経験(特に失敗や焦り、不安などのネガティブな経験)により、自身の英語学習を何とかしたいという強い感情(情意)を有していることが引き金になる傾向にあることが明らかとなった。その上で、授業内でメタ認知などの方略指導を受け、さらに、他の授業やクラスメートから聞き及んだ情報などを基に、メタ認知方略の有用性を再認識する過程(足場)を経て、メタ認知方略を習得していく可能性があることもわかった(図1参照)。

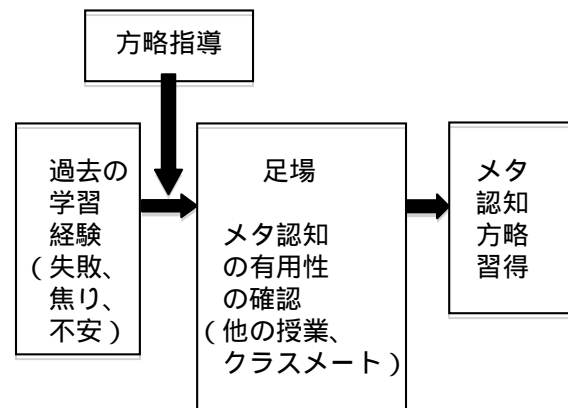


図1. メタ認知方略の習得過程

(2) また、メタ認知方略の習得過程を探究する中で、習得を妨げる要因として、他者からの強制(他律的学習)がないことや、方略使用時に感じる心理的負荷(コスト)が関係している可能性が明らかとなった。

他者からの強制の具体例としては、授業内での教師による課題設定や小テストなどが挙げられた。つまり、過去のネガティブな学習経験などがなければ、授業内でおこなわれるこれらの活動が授業外学習の原動力となり、授業外学習を実施するためにメタ認知方略を習得していくことになると考えられる。

また、方略使用時に感じる心理的負荷(コスト)には、例えば、メタ認知方略(定期的な復習や、振り返りなど)の使用には時間が掛かるため、なかなか継続的に使用できないという考えなどが含まれる。

(3) 上記(1)、(2)で形成された仮説を検証したところ、情意要因の中でも、外発的動機および自己効力感が、メタ認知方略の目標設定やメタ知識の一部の習得にのみ影響があり、総じて、学習者の情意要因はメタ認知の習得

にさほど影響を及ぼさないことが明らかとなった。

授業外学習の記録シートの内容を分析してみても、動機の高さの違いにより記録シートの提出状況には違いが見られたものの、内容には特に違いは確認されなかった。

これらの結果より、メタ認知方略の習得には、情意よりもむしろ、メタ認知方略を使って学習を進めざるを得ない他者からの強制（他律的学習）のある環境の方が、重要であるという知見が得られた。この知見と同様の報告は、EFL 環境における方略指導や授業外学習のための方略指導を調査した先行研究でも、なされている（Cross, 2010; Graham & Macaro, 2008; Lam, 2009; Sanprasert, 2010 他）。

つまり、授業内でのメタ認知指導が、授業外での自己学習により役立つようにするためには、外的環境を整え、メタ認知を使う課題を提供したり、授業外学習を促進する議論を授業内で実施したりすることで、授業内外の学習を有機的に結びつけること（竹内, 2008）が必要と言えるであろう。

(4)さらに、動機や自己効力感を上げることも、メタ認知方略を駆使し、自律的な学習を進めることに寄与することがわかった。特に、英語学習を進める上での理想自己をより鮮明に思い描くことや、自身の能力に自信を持ち自己効力感を高めることが、自律的な学習に繋がることがわかった。

(5) 以上の知見をもとに、授業内外の学習を有機的に結びつける仕組みの一案として、授業内での協働学習を提案するに至った。そこで、協働学習が、メタ認知方略を使った授業外の自己学習を習慣化する足場になりうる理由を探ったところ、協働学習により

- (a) 問題の答えがより明確になる、
- (b) (英語で議論をすることにより) 英語を使う練習の機会となる、
- (c) 今後の英語学習の参考になる情報を入手できる、
- (d) 問題の答えを確認できるため自信を付けられる、
- (e) 他の学習者との関係性を構築できる、
- (f) 授業外での学習を必ずすることになり、習慣づけができる、

という6種類の理由が浮き彫りとなった。また、それらを協働学習の2要素（互恵的相互依存および個人の責任）に照らし合わせると、互恵的相互依存に該当する理由が大半を占めることが明らかとなった（表1）。

表1. 協働学習が役立つと思う理由

理由	%
互恵的相互依存	
a) 問題の答えがより明確になる	47.37
b) 英語を使う練習の機会	21.05
c) 今後の英語学習の参考情報	10.53
d) 解答に対する自信の付与	7.89
e) 他の学習者との関係性構築	7.89
個人の責任	
f) 授業外学習の習慣づけ	5.26

< 引用文献 >

Cross, J. Metacognitive instruction for helping less - skilled listeners. *ELT Journal*, 65, 2010.408 -416.

Graham, S., & Macaro, E. Strategy instruction in listening for lower - intermediate learners of French. *Language Learning*, 58, 2008. 747-783.

Lam, W.Y.K. Examining the effects of metacognitive strategy instruction on ESL group discussions: A synthesis of approaches. *Language Teaching Research*, 13, 2009.129-150.

Sanprasert, N. The application of a course management system to enhance autonomy in learning English as a foreign language. *System*, 38, 2010. 109-123.

竹内 理 『CALL 授業の展開-その可能性を拓くために』 2008、松柏社

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 12 件)

Ikeda, M. Why does collaborative learning scaffold the regulation of out-of-class individual learning? 関西大学外国語学部紀要、査読無、第11号、2014、15-24.

Ueki, M., & Takeuchi, O. Forming a clearer image of the Ideal L2 self: The L2 motivational self system and learner autonomy in a Japanese EFL context. *Innovation in Language Learning and Teaching*, 査読有、No. 8, 2013, 20-38.

Ikeda, M. How do learners incorporate the metacognitive strategies taught in the classroom into their strategy repertoires? 関西大学外国語学部紀要、査読無、第8号、2013、115-131.

〔学会発表〕(計 11 件)

Ikeda, M., & Takeuchi, O. Do learners' affective factors influence the effectiveness of metacognitive strategy intervention? The 17th World congress of Applied Linguistics (AILA ' 14)、2014 年 8 月 15 日、Brisbane (Australia)

池田 真生子、竹内 理、メタ認知指導への情意要因の影響、全国英語教育学会第 39 会北海道研究大会、2013 年 8 月 11 日、北星学園大学(北海道・札幌市)

門田修平、高島英幸、竹内 理、日本の外国語教育の将来を考えるー習得・教授法・学習者要因(パネルディスカッション) 平成 24 年度外国語教育メディア学会関西支部春季大会(招聘講演) 大阪教育大学柏原キャンパス(大阪府・柏原市)

〔図書〕(計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池田 真生子 (IKEDA, Maiko)
関西大学・外国語学部・准教授
研究者番号：00425323

(2) 研究分担者

竹内 理 (TAKEUCHI, Osamu)
関西大学・外国語学部・教授
研究者番号：40206941